

ポグロムから米国移住へ

黒川知文

はじめに

十九世紀後半のロシアは革命運動の進展とともに民族主義が台頭する状況にあつた。民族主義に基づく反ユダヤ主義も生起し、南ロシアの定住地域に居住するユダヤ人は、二十世紀の初めにかけて、大きく三波にわたるポグロム（ユダヤ人に対する暴動）により海外移住を余儀なくされた。その大半はアメリカへと移住した。

ポグロムとはどのようなものであり、東欧とロシアのユダヤ人はアメリカへどのようにして移住して、またどのような社会を形成したのであろうか。

本稿は、ユダヤ民衆に視座を置いて、内戦期ポグロムを概観し、さらにアメリカ移住の過程と移住後のユダヤ社会について考察するのを目的とする。

一 内戦期のポグロム

一八八一年から一九一四年までに発生したポグロムとユダヤ人差別法のために、すでに約二百万人のユダヤ人がロシアを去つた。

第一次世界大戦が始まると、ユダヤ人はその社会的地位を向上させるために、志願兵として積極的に参加した。約八万人のユダヤ人は兵士となり最前線に派遣された。定住地域が戦場となつたために、ユダヤ共同体は被害を受けた。戦争のため難民となつたユダヤ人は、ポーランド、リトアニアからウクライナへ流れ込んだ。このため、ユダヤ人戦争被害者救済機構（ $\text{O} \times \text{O} \times \text{O}$ ）が設立され、ユダヤ民に住居、食物、職業等が供給された。

一九一七年革命後の九ヶ月間は、ユダヤ人にとって解放の時であつた。この期にユダヤ人は、政治活動にも参加した。ほとんど全ての民主主義的及び社会主義政党へのユダヤ人の参加があつた。しかし、こうした政治活動に加わつ

たユダヤ人は青年層に限られ、少数であった。ユダヤ人の大半は、帝政期と同じく定住地域内において生活していた。

革命から一九二一年にかけて続く内戦期、特に一九一九年から二〇年にかけて、再びウクライナにポグロムが発生した。ペテルブルクにて革命を画策したソヴェト軍が、ウクライナにも自らの政権を樹立しようと、執政府軍が反革命軍等と内戦を展開したのがこの時期であった。この二年間は、ウクライナにとって混乱と破壊の時であった。ソヴェト軍と反革命軍、執政府軍と農民匪団、カザーク軍等による戦闘の中にあつて、無政府状態は続いた。政権はめまぐるしく変わり、ウクライナは不安定な状況に置かれた。この状況下に、ユダヤ人に対する暴動、ポグロムが、かつてないほどの規模で発生した。

内戦期ポグロムに関する史料としては、発行されたのがポグロム発生直後であり、しかも体系的に公的機関によってまとめられたものとして、以下の四史料がある。

A 史料：Committee of Jewish Delegations, *The Pogroms in the Ukraine under the Ukrainian Governments 1917-1920*, Paris, 1927.

B 史料：E. Heifetz, *The Slaughter of the Jews in the Ukraine in 1919*, New York, 1922.

C 史料：С.И. Гусев-Оренбургский, "Борьба Книга" *Погромы*

1919-20гг на Украине, Харбин, 1922.

D 史料：Я.Б. Шехтман, *Погромы добровольческой армии на Украине*, Берлин, 1932.

ユダヤ人迫害事件を記録した文献は、しばしば死亡者数が一致しない。たとえば、一六四八年に発生したフメリニツキーの虐殺事件のヘブライ語史料においては、死亡者数と被害状況にかなりの差が見られる。これは、ユダヤ人著者の誇張によるものである。

これに対して、内戦期のポグロムを扱ったこれらの史料は、ウクライナ人、ロシア人等を含めた複数の者が調査した公的機関によるものである。しかし、それにもかかわらず、死亡者数は一致していない。

C 史料では、死亡者は少なくとも二十万人以上、B 史料では十二万人以上、となっている。A 史料とD 史料にはその言及はない。また、ゲーゲリの調査によると、死亡者は最低五ないし六万人となる。

ポグロムを示すことによって反ユダヤ主義者を非難する傾向のあるC 史料の死亡者数二十万人以上は、誇張だと考えられる。また、各史料によって調査地域に差があるために、こうした差が生じたとも考えられる。また、ゲーゲリは、最低死亡者数を合計して五ないし六万人としたために、

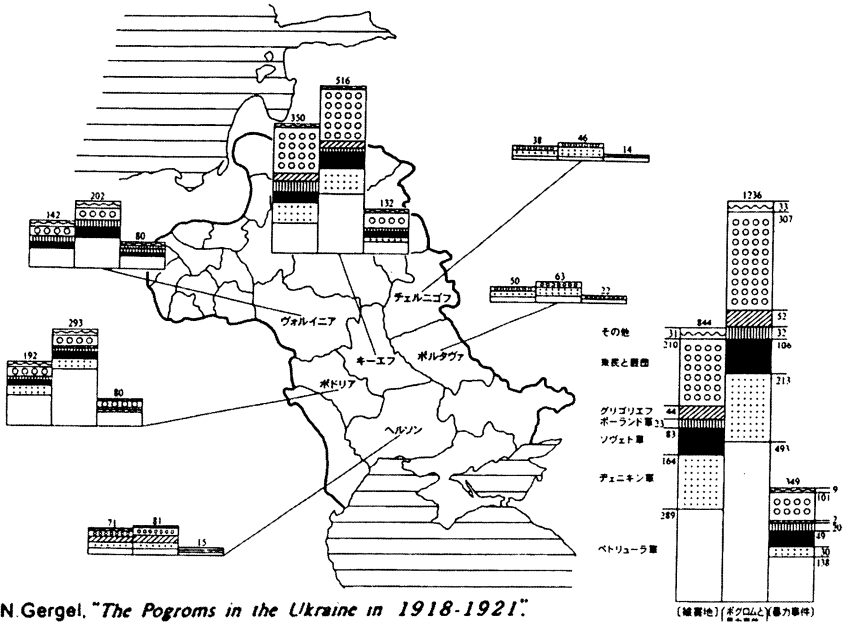
実際にはそれ以上の死者がいたと考えられる。したがって、死亡者数は、十万人前後とするのが妥当であろう。以上、史料として公的機関によるこれら四史料を使用し、総合的に分析する。

内戦期ポグロムと暴力事件と地域と加害者によって分類すると、以下のことがいえる。第一に、全ての地域においてペトリユーラ軍と農民と匪団とはポグロムを起こしたこと、第二に、その他の加害者によるポグロムは特定地域に限られていることである。

こうした性格をふまえ、加害者を軍隊と軍隊的集団とに一応区分し、軍隊によるポグロム、すなわち、ペトリユーラ軍（執政府軍）、ヂエニキン軍（義勇軍）、ソヴェト軍、農民と匪団の順に見ることにする。なお、グリゴリエフ軍は匪団に含まれるために、また、ポーランド軍によるポグロムはわずかであり、しかも限られた地域に発生したために、これらは分析対象から外した。（図1参照）

(1) 執政府軍によるポグロム

執政府軍であるペトリユーラ軍によるポグロムは、一九一八年十二月から一九二〇年終に至るまで発生した。特に一九一九年一月から四月にかけて、また同年七月と八月には、匪団とともにポグロムを起こした。そ



N. Gergel, "The Pogroms in the Ukraine in 1918-1921," YIVO Annals of Jewish Social Sciences, Vol. 6 (1951), p. 245から作成

図1 内戦期のポグロム

の後、

一九二〇年六月にキエフから撤退する時にもポグロムを起した。

ゲーグリによれば、全ポグロム件数の四〇・〇%、全死亡者数の五三・七%は執政府軍によるものであり、彼らのポグロムは、殺害行為を主とした残虐なものであったと考えられる。地域的に言っても、キエフ県、ポドリヤ県、ヴォルィニア県を中心にして、ヘルソン県、ポルタヴァ県、チェルニゴフ県においても彼らによるポグロムは発生し、革命期ポグロムの約半分を占めたといってもよい。

彼らによるポグロムの主要発生地をさらに詳しく見ると、そのほとんどが、執政府軍の勢力地域内にあることがわかる。それ以外の地域で生じたポグロムは、匪団と協力してなされたものであった。

ドイツ革命によってドイツ軍がウクライナを去り、ヘトマン体制が崩壊し、一九一八年十一月に成立した執政府は、翌月十四日にキエフ市に入城した。当初は少数民族の自由を認めていた執政府ではあったが、しだいに非ウクライナ人への圧迫政策を展開し始めた。

一月には、ユダヤ人とロシア人とを執政府の敵とし、特に前者を「投機家」、「ポリシエヴィキ」と呼ぶ文書が発行された。また、同じ時期に軍部から発行された文書には、匪団にポグロムを起こすよう命令したのもあった。

このような反ユダヤ宣伝活動の後、十二月から一月にかけて、執政府軍によるポグロムが、ヴォルィニア県、キエフ県を中心に発生した。

この時期のポグロムは、強盗、略奪、暴行をその内容としており、殺害はまれであった。また、ユダヤ人が見代金を払うことによってポグロムを中止した例もあった。したがって規模は小さかったといえる。しかしこの時に、ポグロム参加者が処罰されなかったことから、しだいにポグロムは広がり、また組織的なものへと変わっていった。

キエフ県の西にあるポドリヤ県においては、キエフ県についてポグロムが多く発生した。ゲーグリの調査によると、一九一九年から二二年に発生したポグロムの二三・七%、死亡者数の二六・一%はこの県においてであった。さらに、ポグロム加害者に関しては、ポドリヤ県に発生したポグロムと暴力事件の五八・四%は執政府軍によるものであった。この割合は、他県と比較してかなり高い。

一九一九年には、この県のガイシン、バルタ、ヴィニツァ、プロスクロフ、カーメネツ近郊などを中心にポグロムが発生した。このうち、二月中旬に発生したプロスクロフにおけるポグロムは、革命期において最も多くの犠牲者を出したものであった。

執政府軍によるポグロムの性格をまとめると以下の点

があげられる。

・軍隊による組織的なポグロムであり、指導者の命令通りに行われた。

・略奪行為よりもユダヤ人虐殺に加害者は集中した。

・ユダヤ人を、ウクライナに無秩序をもたらした者として、ポリシヴィキと同一視した。

・「ウクライナを救うためにユダヤ人を殺せ」のスローガン下にポグロムが行なわれた。

(2) ゼエニキン軍によるポグロム

反革命軍である「義勇軍」によるポグロムに関しては、Я・Б・シエフトマンによるD史料集がある。

シエフトマンによると、一九一九年六月から翌月五月までの間、「義勇軍」によるポグロムは、合計二六七の地点において、二九六回発生した。この記録は、ゲーゲリの調査とほぼ一致する。最も多く発生したのは、キエフ県であり、全体の三割以上を占めている。次にポドリヤ県、ヘルソン県の順に多く発生したことになる。「義勇軍」によるポグロムは、ヴォルイニア県においてはほとんど発生しなかった。その理由は、「義勇軍」の侵入地域を見ることによってわかる。「義勇軍」のうちポグロムを起こしたゼエニキン軍は、キエフ市とヴィニツァ市を結ぶ地点より東へは侵入しなかった。そのためにヴォルイニア県において

同軍によるポグロムはそれほど多くは発生しなかった。発生したポグロムは、義勇軍敗残兵や匪団に参加した者などによってであった。

ゲーゲリの調査によれば、「義勇軍」の主体となったゼエニキン軍によるポグロムは、一九一九年から二一年にかけて生じた全ポグロムの十七・二％であり、死者数では十七・〇％を占めた。さらに、その一ポグロムにおける死亡者数は三七・九人であり、五〇・九人のペトリューラ軍、七七・一人のグリゴリエフ軍によるポグロムほどではないが、それでもかなりの規模であったと考えられる。

「義勇軍」は、一九一九年六月にウクライナに侵入し、ポリシエヴィキと戦い、九月にキエフ市を占領した。第二期のポグロムは、こうしたポリシエヴィキとの戦闘中に発生したものである。

「義勇軍」の主体となったゼエニキン軍によるポグロムを分析した結論として、以下が指摘できる。

・反ユダヤ宣伝が、ポグロム発生直前に新聞に掲載され、それが噂となって兵士に広まっていた。

・ポグロムは、軍隊による組織的なものであり、ユダヤ人に集中した。

・虐殺だけでなく、略奪、放火、家屋破壊などがその内容であった。

・ユダヤ人を、革命陰謀家とみなし、「ユダヤ人を殺し、ロシアを救え」のスローガンのもとにポグロムは発生した。

(3) ソヴェト軍によるポグロム

これまで見てきた執政府軍と「義勇軍」によるポグロムには、ユダヤ人をポリシエヴィキとみなし、ユダヤ人を殺すことによって、ウクライナを、またロシアを救おうとする理念があった。しかしソヴェト軍によっても、ポグロムは起こされた。そこで、彼らによるポグロムを分析する。

ソヴェト軍によるポグロム件数は五七件であり、全ポグロム発生地の九・八%を占める。また、暴力事件は四九件で、十四・〇%を占めた。また、死亡者のなかったポグロムと暴力事件の四九・一%はソヴェト軍によるものであり、ポーランド軍の五九・四%について多い。さらに、死亡者のあったポグロムと暴力事件における一ポグロムあたりの死亡者数は、十四二人であり、平均の四五・五人をはるかに下まわっている。

以上から、ソヴェト軍によるポグロムは小規模であり、殺害例もかなり少なかったことがわかる。

発生地は、キエフ県、ヴォルィニア県、ポドリヤ県に集中しており、執政府軍と「義勇軍」との戦闘があった地といえる。

ゲーグりは、ポグロムに参加したソヴェト軍を分類した。それによると、タラシチャ連隊、ブデヌイ軍、第一ソヴェト連隊が主な加害者であった。これらの軍隊は、ソヴェト軍による全ポグロムの六七・九%にのぼる割合を占めている。ゲーグりはタラシチャ連隊と第一ソヴェト連隊は、元執政府軍の兵士、ブデヌイ軍は元ヂエニキン軍の兵士を主体としており、純粋なソヴェト軍ではなかったと指摘している。

E・ハイフェツもまた、ポグロムを起こしたソヴェト軍には、匪団として独立して形成された部隊、過去ペトリュラ軍側についた部隊、反ソヴェトでありながらソヴェト軍と称した部隊もあったと述べている。

ソヴェト軍によるポグロムについて、以下の点を指摘できる。

- ・小規模であり、殺害件数は少なかった。
- ・ポグロムに参加したのは、執政府軍や「義勇軍」に過去参加した兵士を主体とするソヴェト軍によるものが多かった。

・ソヴェト軍正規軍によるポグロムにおいては、富裕ユダヤ人家屋の略奪が行われた。

・ソヴェト正規軍と国際連隊は、ポグロム中止とユダヤ人保護の任にあたった。その際、ユダヤ人がソヴェト軍に

参加する例もあった。

(4) 匪団によるポグロム

ポグロムは、軍隊的組織を持つ匪団によっても行われた。軍隊によるポグロムとの間にどのような差があったであろうか。また、どのような階層によつて匪団は構成されていたのであろうか。

農民と匪団によるポグロムは千二百七件発生し、全体の二四・八%を占めた。それは四〇・〇%を占めた執政府軍について多い。しかし、死亡者数では、十四・八%にすぎなく、チェニキン軍によるポグロムの死亡者数よりも少ない。一ポグロムにおける死亡者数も二・七人であり、軍隊によるポグロムほど残虐ではなかったと考えられる。

農民と匪団によるポグロムは、どの地方においても発生した。これは、発生地が限られていた諸軍隊によるポグロムとは異なる。キエフ県においては、農民と匪団によるポグロムと暴力事件の発生地数は、執政府軍によるものよりも多かった。

匪団はカザークの頭、アタマンによつて率いられていた。その代表的なポグロムの発生状況を見ると、同じアタマンが何度もポグロムを起こしたことがわかる。また、ポグロム発生地は、アタマンによつて一定地域に限られていたこともわかる。たとえば、ヴォルイネツとリアホヴィイチはボ

ドリア県、ゼレヌイとストルクはキエフ県でポグロムを起こした。

発生日については、一九一九年七月、八月が特に多い。しかし、一九二〇年八月に至るまで、毎月ポグロムは発生した。

以上から、農民と匪団によるポグロムは、最も広汎な地域に、特定時期をもたずに発生したといえる。

匪団の構成員に関しては、一九一九年十月二二日に、ヴィニツァポグロム被害者救済委員会から同委員会本部に送られた報告書の序文に「ポリシエヴィキ支配下で、我々の地方は、ユダヤ人に襲撃を加えた暴動農民の集団が通過したため、我々はひどく苦しんだ」と述べられている。「暴動農民の集団」が匪団であったとわかる。

また、リチンのポグロムについての史料には、ポグロム加害者は、「地方町人と近郊の農民」、ピコフのポグロム史料では「地方農民と近村十五の農民」、ポグレビシチュでは「カザーク(コサック)」によつて成つていたと記されている。さらに、ツルチン、ストリエフカ、ミジコフ、ネミロフ、ヤーノフ、ノヴォ、プリロキ、ヴィニツァ、ツルポフ、パチョラ、ブラツラフでは、加害者は「パルチザン」(partizan)と記されている。「パルチザン」とは、反ソヴェトの労働者と貧農を意味する。

X・クペルシミドの報告によれば、二五人から成る匪団が、ミハイロフカ村、ドズヴィニアツア村、ドルゴレフカ村などに侵入して四十五人となり、チチエフ市にてポグロムを起こした。匪団に加わったのは村の農民であったことがわかる。

以上から、匪団は農民を主体として構成され、下層労働者、コサツクも加わっていたと推定される。彼らはまた、村々を巡りさらに大きな集団となったこともわかる。

キエフ県において、一九一九年八月に、四十の地点でポグロムが発生した。その参加者は、「義勇軍」、執政府軍、ソヴェト軍、匪団であった。

一地点に様々な軍隊が到来してポグロムが発生した例がしばしば見られた。たとえば、同県タリノエ小市においては、ポリシエヴィキ軍の撤退後に、チユーチユーニクの匪団が到来して五三人のユダヤ人を殺した。匪団が去った後、マフノ軍が来て三人のユダヤ人を殺した。彼らが農民から食糧を調達したガリシア方面へ去った後、カザークから成る「義勇軍」が同市を略奪し、放火した。ピエラヤ・ツェリコフイにおいても、執政府軍、ゼレヌイ匪団、カザーク隊が順に到来して、八月末には三百人が殺された。

匪団によるポグロムには以下の特徴を指摘することができる。

・時期と地方に限定されずに発生した。
・規模はそれほど大きくなく、略奪と虐殺をその内容とした。

・匪団と農民はともに行動したが、前者は略奪と虐殺、後者は略奪を目的にしていた。

(5) 軍隊ポグロムと農民ポグロム

これまで分析した加害者別によるポグロムの性格を、組織性、虐殺の有無、略奪の有無、反ユダヤ宣伝の有無によって比較すると、以下のことがいえる。

第一に、組織性は、執政府軍、ヂェニキン軍、匪団などの軍隊及び軍隊的集団において見られた。ただし、ソヴェト軍は例外であった。また、虐殺を行なったのも、こうした軍隊及び匪団であった。

略奪活動は、全てに見られた。ただし、ヂェニキン軍においては、略奪よりも虐殺に集中していた。

反ユダヤ宣伝に関しては、「ユダヤ人を殺して、ウクライナを救え」とする執政府軍と、「ユダヤ人を殺してロシアを救え」とするヂェニキン軍において見られた。このうち、ヂェニキン軍によるものは、政府公認文書によって宣伝されたために、執政府よりも徹底したものだといえる。また、反ユダヤ宣伝によって広がった噂もポグロムの発生に影響を与えた。噂は特に匪団や農民の間で信じられ

ていた。

こうした比較から、二つの類型をたてることができる。まず、執政府軍、ヂェニキン軍匪団によるポグロムは、その組織性、また虐殺と略奪行動、反ユダヤ宣伝の展開、などの点で共通しており、これらをまとめて「軍隊ポグロム」と呼ぶことにする。

一方、ソヴェト軍と農民によるポグロムは、全ての点で共通する。しかし、ソヴェト軍によるポグロムは、発生件数も少なく、略奪行為も富裕ユダヤ人に限られたために、農民によるポグロムと同じ類型にすることはできない。したがって、組織性を持たず、略奪に集中した「農民ポグロム」を、第二の類型とする。

このように類型化すると、一八八一年ポグロムとフメリニツキーのポグロムとの比較もより明確になる。すなわち、民衆の自発性と宗教性との性格を持つ一八八一年ポグロムは、革命期に発生した「農民ポグロム」に類似する。両者とも組織的でなく、虐殺よりも略奪に集中し、しかも噂に影響されたからである。

また、フメリニツキーのポグロムは、革命期の「軍隊ポグロム」と、その組織性、虐殺行為の点で、類似している。ただし、反ユダヤ宣伝は、後者の方がより徹底していた。

さらに、別の観点に立てば、民衆の宗教意識と関係する

のが「農民ポグロム」であり、政治状況に影響されたのが「軍隊ポグロム」といえる。しかし、宗教意識と政治状況とは不可分なものではないために、こうした二類型の区別は、あくまでも比較考察の一手段にすぎないといえる。

(6) ウクライナ農民の状況

一八九七年におけるウクライナ八県の統計によれば、農民の八七・三％はウクライナ人であり、また、ウクライナ人の八六・五％は農民であった。したがって、この時期において、ウクライナ人と農民とはほぼ同義語だと考えてもよい。

また、都市人口を見ると、ロシア人が三三・五％、ウクライナ人三三・四％、ユダヤ人が二八・四％であり、農村の人口構成と著しく異なる。すなわち、青木氏の指摘するように、「ウクライナ社会の構造で最も特徴的なのは、都市と農村とが民族的にまったく異なった性格をもっていた点であった」といえる。ポグロムは、こうした三民族が混在する都市よりもむしろ農村を中心に発生した。

ところで、一九二六年のウクライナ県別民族構成に目を通すと、ポグロム発生県には一つの共通点がみられる。それは、ポグロムが多く発生したドニエプル右岸地方のキエフ県、ポドリリア県、ヴォルィニア県においてはいずれもウクライナ人がその大半を占め、次にユダヤ人が多く、ロシ

ア人はキエフ県以外においては非常に少数であったことである。ロシア人が比較的多く居住していたドニエプル左岸地方において、ポグロムはあまり発生しなかつた。したがって、ポグロムは、ウクライナ農民によるユダヤ民衆に対する暴動であつたといえる。

一九一九年から一九二〇年にかけて、ウクライナ農民にはソヴェト政権による農業政策に対する反感があつた。

一九一九年二月、ソヴェト政権は、以前地主地であつた大経営地を、ソフホーズ組織化のために国有地とし、砂糖工場、ビート畑なども国有化する布告を發した。しかしそれは広汎な農民大衆と結びついたものではなく、実際に、中農、貧農はごくわずかの土地しか受けとらなかつたために、農民側の反対に出会つた。これが、一九一九年春以後のウクライナにおける農民叛乱を呼び起こしたと指摘している。また、一九一九年に始まるソヴェト権力による農民の食糧徵發活動も、農民の反感を呼んだと考えられる。

ところで、ソヴェト政府に対して、農民が持つことを望んだ自らの「政府」とは、いかなるものであつたのだろうか。

(7) 「バーチカ」体制

「バーチカ (Otrisko)」とは「おやじ」を意味する語である。革命期ウクライナ民衆により、カザークのアタマン (首領) に対してこの語は用いられた。

ハイフェツは、「バーチカ」は氣質、考え、生活、性格において、村に密接に存在している者であり、ウクライナ農民の意志を體現化し、農民を先導する者であつたと述べている。

實際、「バーチカ」の社会的地位は、いづれも農民と關係していた。たとえば、ストルクは二十三歳の農民であり、ゼリヨヌイは村の家具師の息子であつた。また、ソコロフスキーは村の司祭の息子であり下級農業官吏、ヤツェンコは、二四歳の農民、ヴォルイネツは、二五歳の農民出の森林行政官であつた。このように「バーチカ」は、農民または農民下層民であつたことがわかる。

革命期から内戦期にかけて、この「バーチカ」を指導者とする匪団がウクライナに数多く存在していた。匪団の構成員に関しては、一九一九年十月二十二日、ヴィニツァ・ポグロム被害者救済委員会から同委員会本部に送られた報告書の序文に「ポリシェヴィキ支配下で、我々の地方は、ユダヤ人に襲撃を加えた暴動農民の集団が通過したため、我々はひどく苦しんだ」とあるように、「暴動農民」であつたことがわかる。

また、リチンのポグロムの史料には、ポグロム加害者は「地方町人と近郊の農民」、ピコフのポグロム史料では「地方農民と近村一五の農民」、ポグレビシチエでは「カザーク

ク(コサツク)によつて匪団は構成されたと記されている。さらに、ツルチン、ストリエフカ、ミジコフ、ネミロフ、ヤーノフ、ノヴォ・プリロキ、ヴィニツア、ツルボフ、ペチョラ、ブラツラフにおいては、加害者は「パルチザン(партизан)」と記されている。「パルチザン」とは、反ソヴェトの労働者と貧農を意味する。

X・クペルシミドの報告によれば、二五人から成る匪団が、ミハイロフカ村、ドズヴィニアツア村、ドルゴレフ村などに侵入して四五人となり、チチエフ市にてポグロムを起こした。村の農民がポグロムに加わつたことがわかる。

このように、匪団は農民を主体として構成され、下層労働者、コサツクもこれに加わつた。また、匪団は村々を巡り農民の参加を得、さらに大きな集団となつていった。

「バーチカ」を指導者とする匪団は、その活動領域をしないで形成した。それは通常一農村であつたが、なかには一地方を掌握する場合もあつた。たとえばストルクはキエフの北、チェルノブイル地方、ソコロフスキーとモルディレフはキエフの西部、ゼリヨヌイとヤツェンコはキエフの南部、アンゲリはガイシン、クリメンコとチューチエニクとポポフは、ウマン周辺が根拠地であつた。また、グリゴリエフとマフノとは、ドニエプル左岸地方に、広域にわたつて影響を及ぼしていた。

以上のように、反乱農民とコサツクを主体とし、豊富な穀物を背景にして形成された体制・「バーチカ」体制は、農民の「政府」であつた。彼らは自らの地域を自らで治め、また守つた。また、前述したようにコサツクが反ソヴェト傾向にあつたため、「バーチカ」体制も、ポリシエヴィキに反抗する体制であつた

二 アメリカ移住へ

ロシアにおける十七世紀以来の反ユダヤ暴動の伝統、そして十九世紀末に生じたロシアとルーマニアにおけるポグロムは、東欧系ユダヤ人(主にロシアとルーマニアとポーランドのユダヤ人)の移民活動の大きな誘因であつたことがわかる。

アメリカへのユダヤ人移民に関しては、大きく四つの波があつた。

・第一波…一八六〇年から一八七〇年

約十五万人のドイツとポーランドのユダヤ人

・第二波…一八八〇年から一九一四年

約二百万人のロシアのユダヤ人

・第三波…一九〇〇年から一九一四年

約十二万五千人のルーマニアのユダヤ人

・ 第四波…一九三三年から一九四五年

約二十四万人のドイツとオーストリアのユダヤ人

特に一八八〇年から一九二五年までの「大移民期」において、約二三七八〇〇〇人のロシアのユダヤ人がアメリカに移民した。(表参照)

(1) 移民の経路
ロシア帝国から国外へ退去するには、非合法の斡旋業者

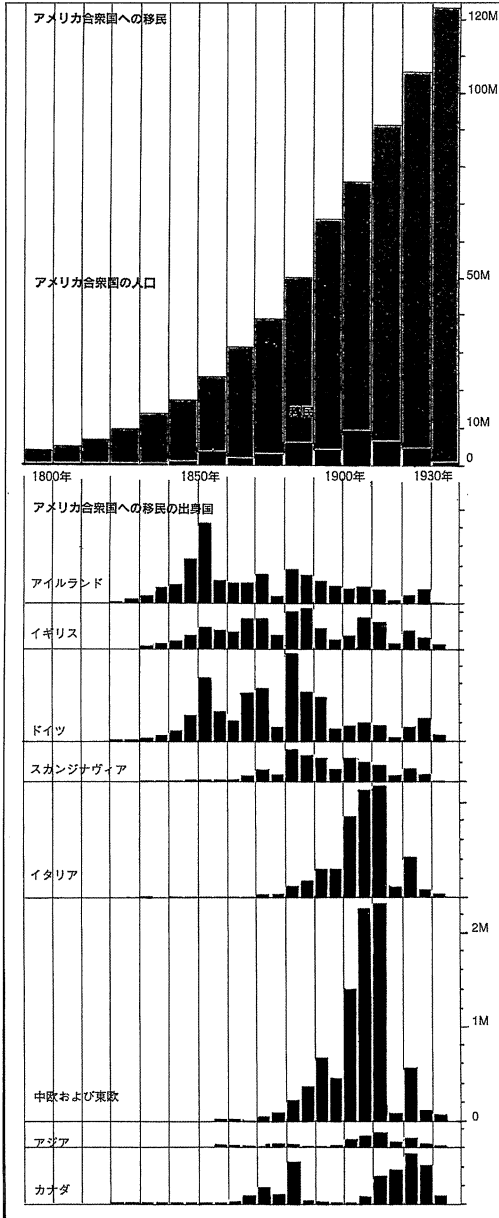


表 アメリカへの移民 (M は100万人)
ピエール・ヴィダル＝ナケ編 (榊山紘一監訳)
『世界歴史地図』三省堂、1995年、231頁

がユダヤ人を導いた。旅券や切符の獲得まで斡旋業者は扱った。
移民に必要な費用は、個人の貯金や私財売買金や他国の親戚からの金銭援助によって支払われた。さらに定住地域内にあったユダヤ植民協会の相互貸付銀行 (Mutual Loan Banks of Jewish Colonial Association) も利用された。一九一四年までには六八〇の同銀行を四十五万人のユダヤ人が利用して交通費を捻出した。

西欧において設立されたユダヤ自助団体のなかで、一八七三年にウィーンにおいて設立されたイスラエル同盟 (Israelische Allianz) は、ガリシアとルーマニアのユダヤ人がアメリカに移民するのを援助した。また一九〇一年にベルリンで設立された援助団体 Hilfsverein も、ロシアからの難民をアメリカに移民させるのを援助した。

またパリ、ウィーン、アムステルダムには一九一四年までには主要なユダヤ病院があった。乗船する前にユダヤ人はそれを利用した。

東欧系ユダヤ人移民は、上記の援助団体や病院のある都市に向けて移動した。

東欧とロシアからのユダヤ人の移民の経路には出身地別に大きく三つの経路があった。

- ・北ロシアのユダヤ人
ウクライナに移動してプロディからオーストリア＝ハンガリー帝国のウィーンへ、そしてドイツの北にある港から船に乗った。
- ・ウクライナのユダヤ人
プロディからオーストリア＝ハンガリー帝国のウィーンへ、そしてドイツへ。あるいはオランダのアントワープから船に乗った。
- ・ルーマニアのユダヤ人

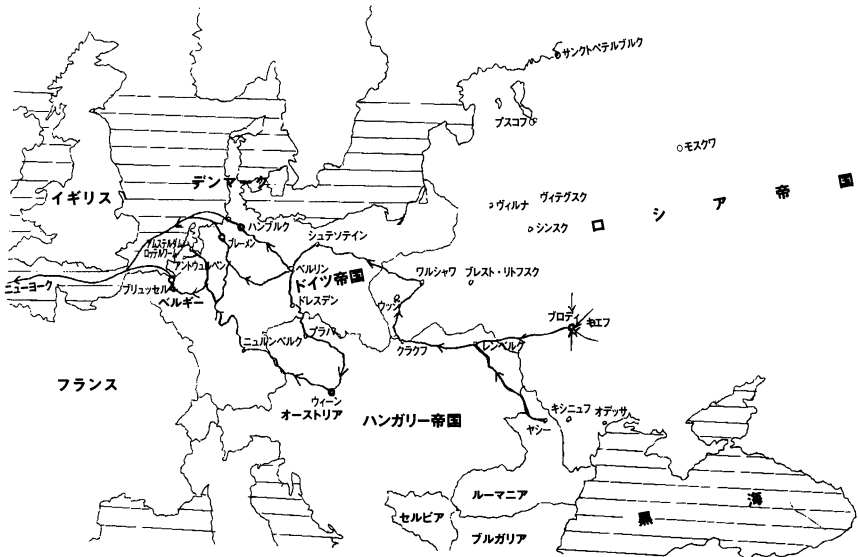


図2 ユダヤ人の移動経路

Ralf Roth/Günter Dinhobiel ed., *Across the Border-Financing the World's Railways in the Vinteen th ad Twentieth araturv*. Burlington, 2008 p.35.53.96 より作成

ウィーンからドイツの港へ行き、船に乗った。(図2参照)
このようなロシアからのユダヤ人の大量移民を実現したのは、十九世紀の運輸革命にあった。鉄道はヨーロッパ諸国をほぼ行きめぐり、一八五〇年代には帆船に代わり蒸気船が大西洋航路に登場した。

また、ドイツのハパク (Hapag) 社はハンブルク・アメリカ・ラインを、新造汽船で北大西洋航路に参入し、一八七〇年代以降は、ドイツのハンブルク南米汽船、オランダのホランド・アメリカ・ライン等が国際競争に参加した。

このように世界の主要定期航路が形成されたのは十九世紀後半であり、ヨーロッパからの移民の多くはこの蒸気船航路を利用した。一九〇五年にドイツの港を出航した外国人二四万人のうち約五万人は東欧系ユダヤ人であった。イギリスからニューヨークまでかかる日数は早くて十日であった。したがって、東欧から鉄道と蒸気船を利用してアメリカまでの所要時間は二週間前後であったと推定される。

(2) ユダヤ人移民援助団体

アメリカにおいてもユダヤ人移民を援助する団体がいくつかあり、積極的に活動した。

主要なユダヤ人自助組織には、一八八四年に設立されたヘブライ移民援助協会 (Hebrew Immigrant Aid

Society)、一八九三年に設立されたユダヤ人婦人国内協会 (National Council of Jewish Woman) があった。また、アメリカに移民するユダヤ人に対する救済機関には、以下があった。

ブネイ・ブリス (Bnai B'rith 「契約の子ら」)

一八四五年にドイツ系ユダヤ人によって創設された友愛と奉仕を中心とする団体である。ワシントンに本部があり、アメリカのユダヤ人団体の中で最大の組織である。一九一三年には、反ユダヤ主義と闘う ADL 同盟 (Anti-Defamation League) を設立した。現在、ニューヨーク国連本部前に全国本部を置き、全米に三一の支部を持ち、あらゆる形態の反ユダヤ主義を監視している。

ヘブライ保護移民援助協会 (Hebrew Sheltering and Immigration Aid Society)

一九〇九年に、東欧系ユダヤ人移民を救済するために創設された。主な目的は、移民の親族や家族を探し出し、入国および市民権を獲得するための書類の用意し、就職をも斡旋することであった。東欧系ユダヤ人社会に活動していた Hebrew Free Loan Society (一八九二年設立) と Beth Israel Hospital (一八九〇年設立) が合体した協会である。

アメリカユダヤ人委員会 (American Jewish Committee)

一九〇六年に、ユダヤ教保守派神学校を救済するためにドイツ系ユダヤ人によって設立した。特に、ロシアのユダヤ人の救済活動に積極的であり、後にはホロコーストのユダヤ人犠牲者に対する補償問題も提起した。

アメリカユダヤ人会議 (American Jewish Congress) 第一次世界大戦後のユダヤ人問題について、一九一八年十二月にフィラデルフィアで討議した会議が常設機関となった。アメリカユダヤ人委員会よりも広汎な組織となり、世界における反ユダヤ主義との対決を重要な課題にしている。

アメリカユダヤ人合同分配委員会 (American Jewish Joint Distribution Committee)

ヨーロッパのユダヤ人を救済するために設立された委員会である。正統派ユダヤ人によるユダヤ人戦争被害者救済中央委員会 (Central Committee for the Relief of Jewish War Sufferers) と、アメリカユダヤ人救済委員会 (American Jewish Relief Committee) により集まった募金を一本化して分配するために一九一四年十一月に組織された。一九一四年から一九二四年にかけて五千九百万ドルが海外へ送金された。東欧各地にも被害者救済センターを設立し、資金は病院や学校建設等にも充てられた。

このようにロシアと東欧からの移民は、実に恵まれた環

境のもとにアメリカへ移住することができた。

三 ニューヨークにおける東欧ユダヤ共同体

東欧系ユダヤ人はアメリカに移住してどのような共同体を形成したのであろうか。

一八八一年から一八九〇年にかけて、ロシアから移民したユダヤ人が農業植民活動に従事したのは、中央以西のオレゴン州、コロラド州、ノースダコタ州、サウスダコタ州、カンサス州、アーカンサス州、ルイジアナ州であった。また一八八〇年から一九一四年にかけて、ロシアからの移民ユダヤ人の数が二百万人を超える都市は、セントルイス市、シカゴ市、フィラデルフィア市、ボストン市、そしてニューヨーク市であった。一九〇〇年以降、ニューヨーク市はアメリカ最大のユダヤ人口を有する都市になった。

ニューヨーク市では南東部のロウーイーストサイドに東欧系ユダヤ人は集住した。その人口は、一九一〇年には約五万人であった。

ロウーイーストサイドのユダヤ人共同体を例にして、東欧系ユダヤ人が形成した共同体について考察する。

(1) 構造

東欧系ユダヤ人は、シユテットルと呼ばれる独自の共同

体を形成した。シユテットルは、シナゴークと市場とユダヤ人家庭から成っていた。シユテットルの三要素であるシナゴーク、市場、ユダヤ人家庭の面からと比較する。

シナゴーク



写真 1898年のニューヨーク ヘスター通り

I. Howe&K. Libo. *A Documentary History of Immigrant Jews in America-How we Lived 1880-1930* New York, 1981.p.66

東欧系ユダヤ人の多くは正統派であったので、シナゴークの周辺に居住した。安息日に移動できる距離規定により、そうならざるをえなかったのである。ロアーイーストサイドにおいても、主要な十二のシナゴークが中心部に位置している。一九〇四年においてロアーイーストサイドには三〇七のシナゴークがあった。

一九一七年ニューヨーク市全体では七八四の公式シナゴークと三四三の一時的シナゴークがあった。同年におけるラビの数は五〇人以下であったので、ラビのいないシナゴークが大部分であった。ロアーイーストサイドの南東部には教育施設や慈善施設も六か所見られる。

市場

シユテットルでは市場は経済活動の中心であり、またユダヤ人にとって「異邦人」と交流する場でもあった。市の日には、早朝から荷馬車で市場はいっぱいになった。ロワーイーストサイドにおいても中心部にヘスター通り、ラトガーズ広場、シユアード公園などがあり、そこは出店にぎわう通りになっている。ヘスター通りの多くの出店と馬車とで混雑する様子は、シユテットルの市場の様子と大差ない。(写真参照)

ユダヤ人家庭

東欧系ユダヤ人にとって家庭は生活の基礎単位であっ

た。特に安息日には礼拝がもたれる重要な場であった。金曜日日没後、家族全員は正装して父親が安息日礼拝の司式をする。家族以外の貧者も招待する。ロウーイーストサイドにおいてユダヤ人家庭は集住していた。多くの場合、五階建てビルの二階より上がユダヤ人の居住する安アパート (tenement) で一階はテント付の商店になっていた。一九

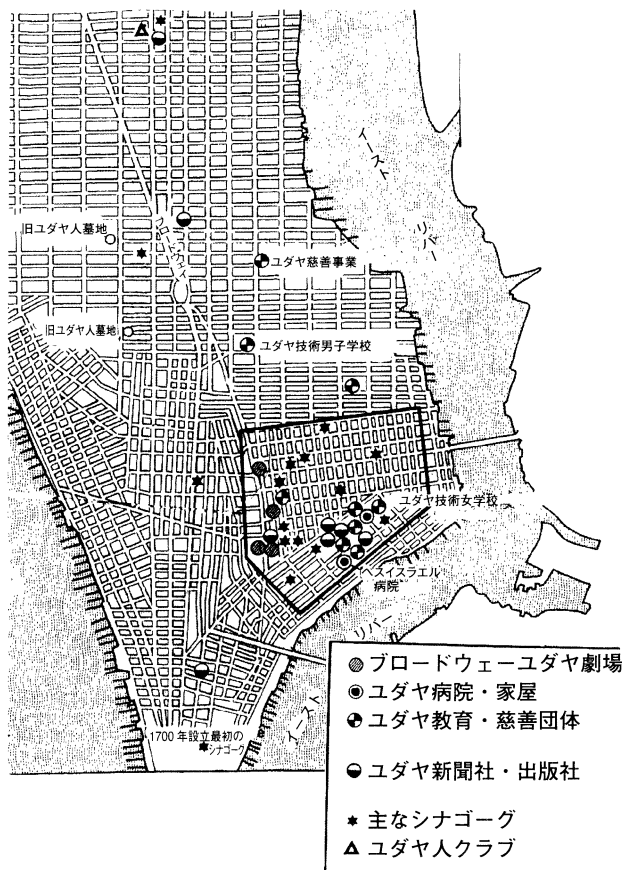


図3 1900年のニューヨークのユダヤ人地区
M. Gilbert, *Jewish History Atlas*, London, 1969, p.82

以上のことから、ロウーイーストサイドにおいても東欧系ユダヤ人はかつてのシユテットルを形成していたことがわかる。ただしそれは、アメリカにおいて変化していった。特に宗教状況、経済状況、ユダヤ人家庭は米国においてどのように変化したのであろうか。
(2) 宗教状況

○四年には六万四〇〇〇もの多くの家庭が六〇〇〇の安アパートに密接して居住していた。ロウーイーストサイドの西側にはユダヤ病院、四棟のユダヤ劇場、南東部にはユダヤ新聞社と出版社が五棟設立された。
一八八一年ボグロムの発端となったエリサヴェトグラード市の中心部の構造とロウーイーストサイドの構造を比較しても、シナゴグを中心にしてユダヤ人のための病院、学校が集中しており、両者は基本的に同じ構造であることがわかる。(図3 参照)

大戦間期のアメリカにおいてユダヤ教には正統派、保守派と改革派が存在していた。

正統派ユダヤ教

正統派は、書かれたトーラーと口伝トーラーと戒律を厳密に遵守するユダヤ教である。正統派は十七世紀から十八世紀にかけてセファラド（スペイン）系ユダヤ移民によりアメリカにもたらされた。セファラド系ユダヤ人の慣習はアシケナズ（ドイツと東欧）系ユダヤ人の慣習とかなり異なる。礼拝儀式だけでなく、シナゴークの装飾、ヘブライ語の発音までも違いがあった。十九世紀にはセファラド系ユダヤ人は中流階級に属していた。東欧系ユダヤ人移民は貧困階級に属していたのでセファラド系ユダヤ人に融合することはなかった。

一八五二年には、すでにニューヨーク市において東欧系ユダヤ教徒の会衆が存在していた。アメリカ全土において一八八〇年には二七〇のシナゴークが設立した。一八八二年以降、東欧系ユダヤ人の移民が激増し、シナゴークの数は、一八九〇年には五三三に、一九〇六年には一七六九、そして一九一六年には一九〇一へと大幅に増加した。

すでに十九世紀前半にアメリカに移住していたドイツ系ユダヤ人の多くはキリスト教に改宗してアメリカに同化するか、改革派ユダヤ教を創設した。しかし東欧とロシアで

は伝統的ユダヤ教が十九世紀後半においても根強く信じられていたので東欧系ユダヤ人の多くはキリスト教への改宗を拒否した。

一九二〇年にはアメリカのアシケナズ系ユダヤ人の正統派が、正統派ラビ協会と、アメリカとカナダの正統派ユダヤ教同盟 the Orthodox Congregations of America and Canada を設立した。

改革派ユダヤ教

一方、十九世紀初頭にドイツに生じた改革派ユダヤ教は、アメリカにおいて進展した。改革派ユダヤ教は、礼拝儀式を刷新し、礼拝に俗語（英語）を使用し、個人的祈りもとりいれ、キリスト教の礼拝と明確な違いがなくなった。また生活規定も改革された。具体的には、頬髭やかつら着用、食事規定を廃止して、ユダヤ教を近代化し、また魅力あるものにした。一八七五年にはオハイオ州シンシナティに改革派の Hebrew Union College が創設された。改革派ユダヤ教シナゴークの礼拝は、ほとんど英語で行われ、会衆は自由に妻や家族とともに座り、帽子も着用せず、祈りの時にうなづく習慣もなくなった。十九世紀末において、米国に移住したドイツ系ユダヤ富裕階級の多くは改革派に属した。

保守派ユダヤ教

保守派ユダヤ教は、正統派と改革派の中間に位置した。十九世紀中葉において、米国の保守派シナゴグでは、男女別席となり、トラー朗読は男性のみとされた。礼拝において説教は英語だがヘブライ語も使用され、礼拝時間は短縮された。

しかし、正統派、保守派、改革派は互いに対立していたわけではなかった。これら三派は、一九二六年にアメリカシナゴグ評議会 (Synagogue Council of America) を組織し、ユダヤ教に関する限り協力する体制になった。

東欧系ユダヤ人の宗教状況

東欧系ユダヤ人移民の宗教に関する統計資料はないが、アメリカに在住するようになって、正統派から保守派に転じる者が多くいたと推定される。正統派には厳しい安息日規定があり、それを遵守するなら就業時間を守れなくなり仕事ができないからだ。

他方、アメリカに来てキリスト教に改宗する東欧系ユダヤ人も現れた。その多くはユニテリアン信者になった。すでに一八二五年にはアメリカ・ユニテリアン協会が成立している。ユニテリアンはキリストの神性を否定して父なる神だけを信仰し、また倫理的行為を強調する。それは排他的な一神教で律法を遵守して倫理的行為を実施するのを教えるユダヤ教と大きな違いはない。ユダヤ人にとってユニ

テリアンは教義上、違和感があまりない宗教だと考えられる。

東欧系ユダヤ人の第二世代になると、学校教育の影響によりプロテスタントに改宗する者が増加する。だが、カトリックに改宗する者は少数であった。ユダヤ教と共通する思想があまり見いだせなかったためだと考えられる。

(3) 経済活動

急激な移民活動の発端となった一八八一年ポグロムにおいて、判明した被害者の身分別分類では町人が七二、七%、商人が一二、二%であり、職業別分類では職人、御者、日雇い、雑役人夫などの下層民であった。また、一八九七年にロシアにおいて実施された公的人口調査によれば、ユダヤ人は主として商業・製造業に従事していた。ユダヤ人総人口のうち、商業に従事する者は、その三九、五%、製造業は三四、六三%であった。

一九〇一年から〇六年におけるアメリカへのロシア・ユダヤ人移民の職業調査によれば、その六三%が製造業であった。したがって、ポグロムを逃れて移住したロシア・ユダヤ人の多くは、下層の製造業者であったことが推定される。

巨視的に見れば、アメリカに移住したロシアのユダヤ人の下層製造業者の多くは、アメリカの資本主義発展期に

移住したことになる。彼らはしばらくは貧困と異なる文化と戦い、厳しい条件下で労働に従事しなければならなかったが、二十世紀になると経済的にも恵まれた社会階層へと上昇していくのであった。

西欧中世において、土地所有を許されずに商業に従事しなければならなかったアシケナズ系ユダヤ人が十字軍運動以降の商業経済の進展という歴史の流れにうまく乗ることができたのと同様の現象を、十九世紀末から二十世紀初めのアメリカに移住した東欧系ユダヤ人に見ることがができる。

(4) ユダヤ人家庭

東欧とロシアにおいてユダヤ人家庭はユダヤ教にもとづき父親が権威をもち固い絆で結ばれていた。そのような家庭はアメリカにおいて変化していった。変化には三つの歴史的状况があると考えられる。

第一に、アメリカに移住した東欧系ユダヤ人の約半分は家族ぐるみではなかった。たとえば衣服労働者のロシア系ユダヤ人の場合、その四三％は単身移住し、五年後に妻と家族を呼び寄せている。この期間において家族関係を放棄した者が生じている。そのために家族放棄対策委員会や孤児院が設立された。

第二に、家族を呼び寄せても、妻もアメリカにおいて就

職して労働した。多くのユダヤ人女性は、物品を供給する八百屋、肉屋などの小売商店や、洗濯、衣服製造などの内職により家計を支えた。ユダヤ人労働者階級の女性が家庭を支えたために、父親の権威が低下することもあった。

第三に、ロアーイーストサイドにおいて移民ユダヤ人は、五―七階ビルの安アパートに居住した。一九一〇年には五―四万二〇〇〇人が過密の状況で光や空気が十分はいらない安アパートで生活した。月に十七ドルの家賃を払うことは難しく、ロシア系ユダヤ人の約半分は下宿人において下宿代を家賃にしていた。アパートに帰っても下宿人がいるために家族の絆は弱まらざるを得なかったと推定される。

第四に、ユダヤ教信仰をもたない子弟が多く生じた。故国においては、ユダヤ人児童は五歳になるとシユテットルの初等学校ヘーデルに通い、ヘブライ語と聖書をしつかりと学んだ。一九〇四年にロワーイーストサイドには三〇七のユダヤ教学校があった。しかし経営難のために減少していった。そこで私的教師が小さな塾チエダーで聖書を教えた。多くのユダヤ人子弟が通う公立学校ではユダヤ教を教えなかった。一九〇九年の調査では、ユダヤ人児童の四分の三はユダヤ教教育を全く受けていなかった。

このようにユダヤ人家庭はもはや宗教生活の場ではなくなる傾向にあった。

それでは、家庭に代わって何がユダヤ人の人的交流の場となったのであろうか。それは、職場における労働組合、そして娯楽活動であったと考えられる。

労働組合と娯楽

一九〇〇年にニューヨークにおいて国際婦人服労働組合と統一帽子工労働組合が成立し、翌年にはアメリカ社会党が結成された。このような状況において、一九〇二年には食肉価格の暴騰に抗議する食糧暴動がロワイイーストサイドにおいても生じた。また一九〇五年以後、ロシアから移住してきたユダヤ人は第一ロシア革命を経験しており、アメリカにおいても政治活動に積極的であった。

一九〇九年以降数年間のニューヨークにおいて発生した衣服製造業者の大規模なストライキに、ユダヤ人労働者は参加した。その後もユダヤ人労働運動は、一九二二年の毛皮工ゼネストと男子服産業のゼネストと進展していった。そしてユダヤ人社会主義運動となっていくのであった。

娯楽

ニューヨークに設立されたシナゴークは同時にクラブハウスとなり、信仰的ユダヤ人の交流の場となった。一般のユダヤ人が交流した場は、劇場であった。

一九一八年にはニューヨーク市に二〇のイディッシュユ劇場があった。ロワイイーストサイドの西武には四つの劇場

があった。ユダヤ人労働者は故国の言葉イディッシュ語で語る劇場で疲れをいやした。一夜に五〇〇〇人から七〇〇〇人がイディッシュ劇場に集まることもあった。

また映画も娯楽の対象であった。五セントで入場できる映画館は、一九一〇年にニューヨーク市には四五〇あり、一九一三年には八〇〇にもなった。一九〇八年にロワイイーストサイドには四二の映画館があった。やがて映画産業にも東欧系ユダヤ人は参入し、20世紀フォックス社、ワーナーブラザーズ社、パラマウント映画社を創設した。

カフェもまた労働者のクラブとして交流の場となった。ロワイイーストサイドには三〇〇近くのカフェがあった。ここでは他と異なりコーヒーよりも茶が好まれた。東欧系ユダヤ人には、故国において茶を飲む習慣があったからである。

おわりに

十八世紀後半にロシアは約百万人のユダヤ人を有する国家になった。歴代のロシア皇帝はユダヤ人同化政策を実施するが成功しなかった。またユダヤ人が居住するウクライナは反ユダヤ暴動事件の多発する地域でもあった。十九世紀後半からは民族主義の傾向が強まり、二十世紀の革命以

後までに三波にわたるユダヤ人に対するポグロムが生じた。

多くのユダヤ人は海外へ移住した。東欧系ユダヤ人はアメリカに移住してシユテットルに類似する地域をニューヨークに築いた。しかし劇場と映画とカフェはシユテットルにはない新たな娯楽と交流の場になった。東欧系ユダヤ人はアメリカに居住して労働に従事し、家庭に代わるこのような交流の場を築き、アメリカ社会の中に同化していくのであった。

東欧ユダヤ人はどのようにしてアメリカ社会に文化的に同化していったのであろうか。今後の研究課題にしたい。

参考文献

邦語文献

- ・黒川知文「内戦期ウクライナにおけるポグロム」『ロシア史研究』ロシア史研究会、第四〇号、一九八四年。
- ・「ロシア革命とユダヤ人」『歴史研究』愛知教育大学歴史学会、第四三三号、一九八七年。
- ・「内戦期ウクライナにおける民衆意識」『西洋史学』西洋史学会、第一三九号、一九九五年。
- ・「ユダヤ人迫害史——繁栄と迫害とメシア運動」教文館、一九九七年。
- ・「ロシア社会とユダヤ人——一八八一年ポグロムを中心に

に」ヨルダン社、二〇〇三年。

- ・竹野弘之『タイタニックから飛鳥Ⅱへ——客船からクルーズ船への歴史——』交通研究協会、成山堂書店、二〇〇八年。
- ・ピエール・ヴィダル・ナケ『世界歴史地図』三省堂、一九九五年。
- ・野村達朗『民族』で読むアメリカ』講談社、一九九二年。
- ・「ユダヤ移民のニューヨーク」山川出版社、一九九五年。
- ・松尾かず之『民族から説く「アメリカ」』講談社、二〇〇〇年。
- ・丸山直起『アメリカのユダヤ人社会』ジャパンタイムズ、一九九〇年。
- ・宮脇俊三『ヨーロッパ鉄道紀行』日本交通公社出版事業局、一九九六年。

外国語文献

- ・David Berger ed., *The Legacy of Jewish Migration: 1881 and its Impact*, New York 1983
- ・Committee of Jewish Delegations, *The Pogroms in the Ukraine under the Ukrainian Governments 1917/1920*, Paris, 1927.
- ・Neil M. Cowan Ruth S. Cowan, *Our Parent's Lives The Americanization of Eastern European Jews*, New York 1989
- ・The Immigration Commission, *Report of the Immigration Commission Immigrants in Cities*, Washington 1911
- ・Department of Commerce Bureau of the Census Washington, *Immigrants and their Children 1920*, Washington DC, 1969

- ・ *Encyclopaedia Judaica*, 16vols, Jerusalem, 1971-72.
- ・ N. Gergel, "The Pogroms in the Ukraine in 1918-1921", *YIVO Annals of Jewish Social Sciences*, Vol.6. (1951)
- ・ Martin Gilbert, *Jewish History Atlas*, London, 1969
- ・ Nathan Glazer, *American Judaism*, Chicago and London, 1972
- ・ Susan A. Glenn, *Daughters of the Shield Life and Labor in the Immigrant Generation*, Ithaca and London, 1990
- ・ С.И.Гусев - Оренбургский, "Возрвая Кнута" *Полномы 1919-20 г.г. на Украине*, Харьков, 1922.
- ・ E. Heifetz, *The Slaughter of the Jews in the Ukraine in 1919*, New York, 1921.
- ・ Irving Howe, *World of Our Fathers*, New York and London, 1976
- ・ Irving Howe/Kenneth Libo, *How We Lived | — A Documentary History of Immigrant Jews in America 1880-1930*, New York, 1979
- ・ Samuel Joseph, A.B., *Jewish Immigration to the United States From 1881 To 1910*, New York 1914
- ・ Arcadius Kahan, *Essays in Jewish Social and Economic History*, Chicago and London, 1986
- ・ Simon Kuznets, *Immigration of Russian Jews to the United States: Background and Structure. Perspectives in American History* Vol. IX, 1975, Charles Warren Center for Studies in American History Harvard University
- ・ Noah Lewin-Epstein Yaakov Ro'i and Paul Ritterband ed., *Russian Jews on Three Continents Migration and Resettlement*, London 1997
- ・ Milton Meltzer, *Taking Root-Jewish Immigrants in America*, New York, 1976
- ・ John Quigley, *Flight Into the Maelstrom*, Lebanon, 1997
- ・ Moses Rischin, *The Promised City New York's Jews 1870-1914*, Cambridge and London, 1962 1977
- ・ Ralf Roth/Gunter Dinobol, *Across the Border*, Burlington, 2008
- ・ Ralf Roth/Henry Jacolin, *Eastern European Railways in Transition*, Burlington, 2013
- ・ Я.Б.Шехтман, *Дорогмы договорольческой армии на Украине*, Вегрин, 1932.
- ・ Gerald Sorin, *The Prophetic Minority American Jewish Immigrant Radicals, 1880-1920*, Bloomington, 1985
- ・ Zosa Szajkowski, *Jews, Wars, and Communism* Vol.1, New York, 1972

※本稿は、一九八三年に一橋大学大学院社会学研究科に提出された博士課程修了論文「革命期のウクライナ社会——一九一九年のポグロムと民衆——」の一部を加筆訂正したものである。